5/10 朝日

新安保法制は戦場への橋だ

無職　（米国　65）

米国で同時多発テロが起きた2001年9月11日を機に、大学生だった息子は育ててくれたこの国を守りたいと、米海兵隊に志願入隊した。このテロに関わりのないイラクへの先制攻撃が計画されるとは予測もせずに。イラク戦争に送られたとき、息子は日本国籍だった。

大きな反戦運動のうねりをかき消すように、テロへの恐怖の嵐が吹き荒れ、9・11にイラクが関係したと米国民の多くが思い込んだ。イラクにあるという大量破壊兵器を、誰も見たわけではなかった。平和憲法を掲げる祖国が、米国に「待て」と忠告することを祈ったが、小泉純一郎首相はイラク攻撃を支持した。あの時の深い失望は忘れない。息子はイラクに4回派兵された。何のために地獄を見なければならなかったのか。

今も戦争の影は消えない。無数の人が死に、中東ではテロ組織が人々を震撼させている。間違った戦争は今後も起こりうる。米国の誤った戦争に追従したり、巻き込まれたりする判断をする日本の為政者が再び登場しないとは言い切れない。いま国会で審議されている安保法案が成立すれば、それは日本の若者たちを戦場へ送る橋になる。

福田先生の宿題　戦争伝える

会社員　（兵庫県　59）

7月に85歳で永眠した福田紀一先生。教員をしながら作家活動をされ、私が高3の時の担任だった。日本史の授業は、歴史上の人物や戦時中の話を講談師のように生き生きと語った。

8年前、図書館で先生の著書を見つけ、なつかしく思い、便りをしたところ返事をいただいた。文章がうまく書けず悩んでいると送ったら「文章は何歳からでも好きなように書けます」と励ましをいただいた。直接会いたいと思いながら月日が過ぎてしまった。

先生の授業で日本国憲法は何より理念が大切と教わった。日本の安全保障のあり方が大きく変わろうとするなか、先生の教えを思い出した。心に刻んで行動したいと、先月29日には神戸市で安保法案に反対するデモに参加した。

1977年に刊行された「おやじの国史どむすこの日本史」で先生は、すでに戦争の芽を感じて危惧し、戦争体験を後世に伝える義務があると書いている。今、戦争への道がいよいよ現実味を帯びてきたようだ。父は晩年、悲惨な戦争体験を語ったが、親世代から聞いた戦争の話をどのように子や孫に伝えるか。先生の教えを受けたわれわれ世代の大きな宿題だ。

9/10
朝日

国会前デモ　本多さん思って

無職　（大阪府　63）

旧日本陸軍兵士で、「戦争出前噺」と題して自身の戦争体験を語り、5年前に96歳で亡くなった本多立太郎さんのお話を、何回か聞かせて頂いたことがある。私は元中学教員で、学校にも何度かお招きした。

1960年、本多さんは国会へ向かい、市民の一人として安保闘争に参加。デモに子をおぶった母親もいたとお聞きした。孫の寝顔を見て「孫たちに軍服を着せたくない」と思い、70歳過ぎから始めた出前噺は1300回を超えた。その本多さんが今の安全保障関連法案を知ったら何というだろうかと考えた。

そんな時、学生団体「SEALDs」の若者たちがデモを始めた。じっとしていられず、大阪での街頭アピールや、京都のデモに行き、8月30日は国会前へ。55年前の話のように、赤ちゃんをベビーカーに乗せた母親がいた。孫を連れたおじいちゃん、リクルートスーツの若者もいる。SEALDsのかけ声、「民主主義って何だ？」の答えはまさしくこれだ。自立した一人一人が自分の意思で立ち上がった。政府はこの事実を重く受け止めなければならない。

小雨の降る国会前でハットをかぶった本多さんを見かけた気がした。1300回の思いは次の世代に引き継がれたと思う。